

宗教文化教育の到達目標に関する一考察 —第1～4回宗教文化士試験問題の分析から—

塚田穂高

はじめに—問題の所在と研究課題の設定—

「宗教文化教育」は、宗教教育についての従来の議論の枠組み——「宗派教育」は私立のみで可／「宗教知識教育」は地歴公民等の社会科科目で主に行われているが、断片的な受験知識のみで留まってしまう／「宗教的情操教育」は大切に道徳の授業等で可だが、はたして教えられるのか、国の価値観の押しつけにならないのか、など——の行き詰まりを打ち破り、グローバル化時代にふさわしい自文化・多文化理解をベースとする新たな宗教教育（特に大学における）の理念と実践として、2000年代後半ごろから提唱されてきたものと言える¹。そのこと自体にはおそらく異論などはなく、議論や検討がなされるべきはその中身、すなわち授業内容や教材開発²、到達目標の設定やそれをサポートしていくような制度や仕掛けの構築などについてとなるだろう。

そうした制度構築・基盤構築の取り組みとして、2008年から2010年にかけて、星野英紀・大正大学教授を研究代表者として、科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」が進められ、多くの宗教研究者＝大学教員が集い、精力的な調査研究・検討会議・成果発信が進められた³。その大きな成果の一つとして、宗教文化教育の推進を目的に、宗教文化教育推進センター（CERC、サーク）⁴が2011年1月に設立され、國學院大学の日本文化研究所内に置かれた。

翌2011年度からは、「宗教文化士」制度が発足し、同資格の認定試験が開始され⁵、CERCがその運営にあたっている。同試験はすでに4回実施され、計119名の宗教文化士が誕生している。第5回試験も、2013年11月10日に予定されている。このように、宗教文化士制度はすでに軌道に乗っているのである。

宗教文化教育の推進のなかに宗教文化士資格制度があるのならば、その資格とは一定の到達度・達成度の水準を担保したものだと考えられる。換言すれば、同資格試験において問われている内容や水準とは、宗教文化教育が目指すところを色濃く反映しているだろう、ということである。この点について、受験案内には3つの到達目標が明記されている（後述）。だが、それは縮約され抽象化された「目安」と言えるものであって、それを見ても、何に関するどういった知識や理解がどの程度求められているかについては、よくわからない。それを捉えるためには、「宗教文化士認定試験において、実際にどのようなことが問われているのか」の分析（端的に言えば過去問分析）が不可欠と思われるのである。管見の及ぶ限り、現在までにそのような試みは見当たらず、その作業にも一定の意義を見出せるだろう。

また、この点も詳細は後述するが、同資格試験は、大学教育においてある程度の宗教文化教育を受けた者が受験することを想定している。よって、同資格試験の内容を分析することが、翻ってみれば、大学教育の現場において高校までの（宗教に関する）教育を受けた学生

に対して、教員＝宗教研究者がどのような宗教文化教育を行っていくかデザインし改善していく際の大きな手がかりとなることは間違いないだろう。むしろ、同資格試験は宗教文化教育の最終目的ではないし、試験に合格することだけを教えればいいのではない。だが、以上の側面からしても、この作業を行う意義はやはり大きいと言えるだろう。

よって本稿は、過去の第1回～第4回の宗教文化士試験の問題内容⁶を分析することを通じて、宗教文化教育で何が（一応の）到達・達成目標とされているかを捉え、その内容を考察することを研究課題とする。まず第1節では、宗教文化士制度と過去の試験の概要を確認しておく。続く第2節では、試験問題（主に記号選択式）とその選択肢内容の傾向を分析し、同試験で何が問われているのかその特徴を析出する。続いて第3節では、同試験の記号選択式問題の内容と高校の地歴・公民分野で扱われる内容との連続性と差異を検討し、そこから大学での宗教文化教育にどういった内容が求められているかを考察したい。

なお、CERCは國學院大學の日本文化研究所内に設置されており、研究所プロジェクトとの連携などはあるものの、筆者自身は同センターと同制度の運営委員会メンバーではない（同試験の試験監督は2度務めたことがあるが）。同試験の問題作成などにも関わっていない。その点において本稿は、あくまで基本的に公開されている資料に基づき、客観的な視点から研究・分析を行おうというものであることを予めことわっておく。

1. 宗教文化士制度と認定試験の概要

本節では、宗教文化士資格の制度としての概要、ならびにその資格認定試験の概要と試験結果などについて概観したい。

「宗教文化士」とは、

日本や世界の宗教の歴史と現状について、専門の教員から学んで視野を広げ、宗教への理解を深めた人に対して与えられる資格です。主な宗教の歴史的展開や教え・実践法の特徴、文化と宗教の関わり、現代社会における宗教の役割や機能といったことについて、社会の中で活かせる知識を養っていることが求められます。

と説明されている⁷。同資格を得るには、それぞれの大学において「到達目標」に対応した科目を履修して合計16単位以上を取得し、その上で資格認定試験に合格すること、が必要とされる。この「大学において授業を履修する」という条件が、前提としての大学における宗教文化教育の内容を考えるべき所以であり、単なる知識のみが問われるような諸検定試験とは大きく異なる点である。

この「到達目標」としては、

- ①教えや儀礼、神話を含む宗教文化の意味について理解ができる。
- ②キリスト教、イスラーム、ヒンドゥー教、仏教、神道などの宗教伝統の基本的な事実について、一定の知識を得ることができる。
- ③現代人が直面する諸問題における宗教の役割について、公共の場で通用する見方ができる。

の3点が挙げられている⁸。

そして、①に対応する科目の例として、「宗教学」「比較宗教学」「宗教社会学」「宗教人類学」といった概論系科目や「宗教と芸術」「宗教と文学」といった宗教と諸文化の関わりを扱う科目が、②に対応するものとしては、「神道思想・史」「仏教思想・史」「キリスト教思

想・史」といった宗教思想・史関係の科目や諸宗教の事例を扱う比較宗教学的な科目が、③に対応するものとしては、「現代宗教論」「宗教と社会」「死生学」などといった科目が、それぞれ想定されている。もっとも宗教系私立以外の大学において、「宗教」の語が入った科目を16単位＝8科目履修することは、なかなか困難である。よって実際のところは、「宗教」の語を冠していなくても、広く宗教文化に関わってくるような科目——たとえば民俗学・人類学・文学・美術史など——であれば、受験申請時にOKと判断されるようだ。

同資格制度を運営し試験を実施するのは、前述のCERCである。運営委員には、国内複数大学の教員＝宗教研究者があたっている。同制度・試験についての「担当教員」は、関西大学・関西学院大学・皇學館大学・國學院大學・大正大学・筑波大学・天理大学・東北大学・北海道大学・龍谷大学の10大学にいる。日本宗教学会と「宗教と社会」学会が、同制度の関連学会となっている。また、天理大学附属天理参考館・東洋文庫ミュージアム・公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター・國學院大學博物館が協定機関となっている。

試験は、年2回行われる。会場は、受験者の有無によって変動もあるが、関東では國學院大學を基本としている。関西・近畿では関西学院大学や皇學館大学や龍谷大学など、他地方では北海道大学、東北大学などで過去に実施されている。受験料は5,000円、合格した後の認定料が5,000円である。

試験内容は、記号選択式問題50問（60分）と論述式問題1問（60分・600字以上～800字程度の小論文）から構成されている。具体的内容の検討は、次節にて行う。配点については公開されておらず、「双方において基準に達すること」が求められているが、論述式問題は宗教文化についての的確な理解に基づく「論旨のとあった文章であること」が求められている（すなわち単に勉強して知識だけがあるのではないことを確認する）のであって、ウェイトは記号選択式問題にあるように思われる。

受験資格は、大学生（3年生以上～卒業2年以内）、大学院生（在籍中、修了・退学2年以内）、中学・高校教員（関連分野で3年以上の教育歴）となっている。やはり、単なる知識の有無ではなく、宗教文化教育に関わっている（受ける・授ける）ことが前提とされているわけである。

過去の試験は、2011年11月13日の第1回に始まり、これまで第4回まで実施されている。以下に、各回の実施年月日、会場数、応募者数、受験者数、合格者数、合格率（合格者／応募者）、を一覧で示す。

表1 第1回～第4回宗教文化士試験の
実施年月日・会場数・応募者数・受験者数・合格者数・合格率

回	実施年月日	会場数	応募者数	受験者数	合格者数	合格率
第1回	2011/11/13	6	92	91	58	63.0%
第2回	2012/6/24	6	44	42	23	52.3%
第3回	2012/11/11	5	28	25	16	57.1%
第4回	2013/6/30	7	35	33	22	62.9%
計	—	—	199	191	119	59.8%（平均）

まだ実施回数が少ないので傾向はつかみにくいが、このように推移している。毎回数十名の応募・受験があり、平均すると各回 30 人ほどの合格者を出してきたのである。なお、平均点や合格最低点などは現在のところ公開されていない。

受験者・合格者の多くは、やはり大学生と言える。卒業生・中高教員などは若干名のように。合格者の所属・修了大学名が、CERC サイトで公開されている⁹。合計 25 大学である。会場校や担当教員がいる大学はもちろん含まれるが、それ以外の大学にも広がりを見せつつあることがよくわかる。

なお、同制度ならびに同試験に関連しては、朝日新聞・毎日新聞などの全国紙や共同通信系配信の地方紙、中外日報・佛教タイムス・キリスト新聞・新宗教新聞などの宗教専門紙、『寺門興隆』などの業界専門誌などにおいて、判明しているだけで計 32 回以上報道・紹介されており、ある程度の社会的注目を集めていることがうかがわれる¹⁰。

以上、本節では宗教文化士資格制度ならびに同資格認定試験の概要を確認してきた。次節で検討する試験問題の前提としての制度的設計、特に大学での宗教文化教育を前提としている方針が十分につかめたと言えよう。

2. 第1回～第4回宗教文化士試験問題の分析

本節では、具体的に第1回～第4回の宗教文化士試験の問題内容を見ていく。前述の通り、試験は記号選択式問題 50 問と論述式問題 1 問からなる。後者については、もちろん軽視されるものではないが、小論文という形式から回答を明示できず、過去問も各回 1 問の計 4 問のみである。よって本節では、順序は逆になるが、まずこの論述式問題のごく簡単なレビューを行った上で、重点を置く記号選択式問題の分析に移っていきたい。

論述式問題は、いずれも宗教に関するあるテーマについての 5 つの意見の中から 1 つ（あるいは 2 つ）を選び、それについての自分の意見・考えを述べる形式である。各回の問題と選択肢の内容をかいつまんで以下に示す¹¹。

第1回は、「現代日本の宗教教育」について、「中学・高校での教育は難しいから、大学でならよい」「地歴公民の授業で十分勉強しているから今のままでよい」「高校でなら宗教者を招いて話を聞く機会があってもよい」「中学・高校では人々の実際の生活に結び付いた宗教について学ぶべき」「アブナイと言われているような宗教についてしっかりと教えるべき」の 5 つから選んで論じるものである。

第2回は、「日常生活のなかの宗教文化」を考える際に何が手がかりになるかについて、「年中行事や人生儀礼などの儀礼的習俗」「宗教に関する映画」「宗教建築」「絵画・彫刻・音楽などの芸術作品」「文学作品」から選んで論じるものである。

第3回は、「職業上想定されうる宗教に関連する問題・注意点」についてであり、「公立小学校教師で児童にムスリム子弟がいる場合」「キリスト教系高校に赴任する場合」「ツアーコンダクターとして東南アジアを担当する場合」「国際会議などもあるホテルの宴会関連業務に就く場合」「マスコミ関係で仏教・神道と人々との関わりを取り上げる場合」にどういうことに注意したらよいか助言を与える形式で論じるものである。

第4回は、「宗教文化の理解の必要性・重要性を伝える」というもので、「中高で英語を教えているが、文化的要素特に宗教文化については教える必要がない」「公立学校の社会科で工場や市場などの見学はするが、宗教施設は日常生活に関わっていないので連れて行かな

い」「ホテル勤務でアジアからの客もいるが、文化や宗教の知識がなくても大丈夫」「映画が好きだが、ストーリーが面白ければよく、宗教の知識はなくてもよい」「政教分離は世界的傾向だろうから、政治と宗教は切り離して考えた方がよい」といった考えに対し、反論的な意見を述べるものである。

このように見てくると、これらの設問と選択肢には、宗教（文化）教育はどのような形で可能であり必要であるかという基本的問題意識に始まり、宗教文化が社会のさまざまな局面や諸文化に広く関わっていること、とりわけ特定の職業の具体的局面に関わりうる可能性や、知識や理解があれば物事の見方や対応を豊かにしうるが無知・無関心でいると場合によってはトラブルになりかねない懸念、などの考えが反映されていることがわかる。これらはすなわち、宗教文化教育ないし宗教文化士制度の目指すところに通底する姿勢である。論述式問題のレビューからは、この点をまず確認できた。

次に、記号選択式問題の分析に入る。これは、各設問につき5つの選択肢があり、そこから「適切なもの」を2つ選ぶ方式である。すなわち原理的には、2つ正しい選択肢を積極的に選ぶか、3つ明らかに間違っているものを見つけること（実際はその併用）により、正解にたどり着くわけである。なお、公開・明言はされていないものの、過去問の回答に付記された文言から判断すれば¹²、各問は2選択肢とも正答を選んでいないと正解とはならない（1つだけ合っているでも得点にならない）ようで、ややハードルは高い。また、60分（3,600秒）で50問の問題を解くということは、単純計算でも一問あたり72秒、設問と5選択肢の6つの短文があることから、1文あたり12秒で読んだ上に判断して回答しなければならない。瞬時に間違いを見つけられれば苦はないが、考え込むような時間はほとんどない。この点においても、宗教文化に関する正確な知識とそれに基づいた的確で迅速な判断が受験者には求められているということになるだろう。

過去4回の試験があり、各回50問、各問5つの選択肢がある。すなわち、これまでに200問・1,000選択肢が出ていることとなる。ここでは、これを分析対象とする。ただし、設問と選択肢の内容の全てをここで取り上げることはもちろん紙幅の都合上不可能であるので、具体的な文言は過去問を参照してもらいたい¹³。以下、各回の設問とその選択肢に触れるときは、回をⅠ～Ⅳ、設問を1～50、選択肢をア～オでそれぞれ示す（例：第3回の設問25の選択肢オ→「Ⅲ-25-オ」）。

まずは、過去問が扱った内容の分布を明らかにしたい。以下の表2～5は、第1回～第4回の過去問の各50問×4につき、そこで扱われているテーマの宗教・地域・時代・項目・概念などについて、筆者なりに分類し見出しをつけたものである。

「仏」は仏教、「ユ」はユダヤ教、「キ」はキリスト教、「イ」はイスラーム、「儒」は儒教、「道」は道教、「ヒ」はヒンドゥー教、「ギ」はギリシア神話、「ロ」はローマ神話、「日」は日本神話、「印」はインド神話をそれぞれ省略したものである。

また、各設問に「地歴公民」とあるのは、高校の地歴・公民分野の内容との連続性を示したものである。「日」は日本史、「世」は世界史、「地」は地理、「倫」は倫理、「政」は政治・経済をそれぞれ指す。その選定基準と分析については、次節にて示す。

4回の過去問内容の一覧を見てまずわかるのは、おおよその決まったパターンで50問が構成・展開されていることだ。まず、日本の宗教から始まり、15問ほど続く。その後、中国・韓国の東アジア、東南アジア、インドなどの南アジア、中東などへと展開していく。次

表2 第1回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 神仏関係・宗教史	日・倫	26	キリスト教: 聖職者	——
2	日本の宗教: 神道: 参拝作法	——	27	イスラーム: 六信五行	倫
3	日本の宗教: 神道: 有名神社	日	28	イスラーム: スンナ派・シーア派	倫・世
4	日本の宗教: 神道: 神職	——	29	イスラーム: モスク	——
5	日本の宗教: 神道: 祝詞	——	30	イスラーム: 食事	——
6	日本の宗教: 仏教: 歴史・僧侶・用語	日・倫	31	イスラーム: ムハンマド	倫・世
7	日本の宗教: 仏教: 歴史・社会的形態	日・倫	32	イスラーム: ラマダン	倫・地
8	日本の宗教: 仏教: 平安・鎌倉宗祖	日・倫	33	イスラーム: 基礎知識・歴史	世・地・倫
9	日本の宗教: 仏教系新宗教: 近代	日・倫	34	イスラーム: コーラン	倫
10	日本の宗教: 日本人と宗教との関わり	——	35	世界の神話: ヒ・道・ギ・日・ローマ	世
11	日本の宗教: 年中行事・祭	——	36	ヒンドゥー教: 輪廻	倫
12	日本の宗教: 山岳信仰・神仏習合・民間信仰	日・倫	37	ヒンドゥー教: 神・戒律	——
13	日本の宗教: 新宗教: 近代	日・倫	38	ユダヤ教: 戒律	倫
14	日本の宗教: 宗教教育・政教分離: 近現代	——	39	現代宗教: カルト問題	——
15	日本の宗教: 神道・仏教: 世界遺産・宗教史	日・倫	40	世界の諸宗教: キ・ユ・イ: 世界遺産・各国	地・世
16	日本の宗教: 信教の自由・宗教法人: 現代	日・政	41	世界の諸宗教: 分布・各国	地・世
17	世界の諸宗教: 仏・キ・ユ・儒: 始祖の思想	倫	42	世界の諸宗教: 分布・各国・紛争	地・世
18	東南・南アジアの宗教: 仏教: 各国	地・世	43	世界の諸宗教: 聖地	世・地・倫
19	アジアの仏教: 各国	地・世	44	世界の諸宗教: シンボル	——
20	中国の仏教	倫	45	世界の諸宗教: 分布・各国・建築	世・地・倫
21	キリスト教: 基本知識	世	46	宗教社会学の基礎	——
22	キリスト教: 分布・各国	地	47	宗教研究の基本姿勢	——
23	キリスト教: 分布・各国	地・世	48	宗教研究の基本姿勢	——
24	日本の宗教: キリスト教	日	49	宗教研究に影響を与えた研究者	——
25	キリスト教: 分布・各国	地	50	宗教学の基礎概念: 類感呪術	——

表3 第2回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 神道: 祭神	——	26	中国の宗教: キリスト教	——
2	日本の宗教: 神道: 神社	——	27	アメリカの宗教: キリスト教: 教派・新宗教	——
3	日本の宗教: 神道: 神の性格	日・倫	28	キリスト教: 分布・各国	地
4	日本の宗教: 神道: 神社本庁	——	29	キリスト教: 聖書	倫・世
5	日本の宗教: 神道・仏教: 基礎知識	——	30	キリスト教: 分布・各国	世・地
6	日本の宗教: 神道・仏教: 有名寺社の歴史	日・倫	31	キリスト教: 教会・基礎知識	——
7	日本の宗教: 神仏関係・宗教史	日・倫	32	イスラーム: 礼拝	倫
8	日本の宗教: 仏教: 鎌倉仏教祖師	日・倫	33	イスラーム: 女性・服装	——
9	日本の宗教: 仏教: 檀家制度・歴史	日	34	イスラーム: 習慣	——
10	日本の宗教: 神・仏・キ: 有名社寺教会	日	35	イスラーム: コーラン	倫
11	日本の宗教: 新宗教: 近代	日	36	イスラーム: 習慣	——
12	日本の宗教: 神道・仏教・習俗	——	37	イスラーム: 祝祭	——
13	日本の宗教: 宗教史	日・倫	38	世界の諸宗教: 仏・ユ・キ: 儀礼	——
14	日本の宗教: 宗教史・信教の自由	日	39	世界の諸宗教: キ・イ・仏: 聖地巡礼	——
15	日本の宗教: 結婚・習俗	——	40	世界の諸宗教: キ・イ・仏: 年中行事	——
16	中国の宗教: 道教	——	41	世界の諸宗教: 各国・政教分離	世・日・政
17	上座仏教: 基礎知識・タブー	——	42	世界の諸宗教: 各国: 紛争	世
18	上座仏教: 僧侶の戒律・食物	——	43	世界の諸宗教: 暦	倫・世・日
19	上座仏教: 分布・各国	地	44	世界の諸宗教: 戒律	政・倫
20	日本の宗教: ヒンドゥー教由来の神	——	45	世界の諸宗教: 健康法	——
21	インドの宗教: ヒンドゥー教	世・倫	46	世界の諸宗教: 基礎知識	日・倫
22	インドの宗教: ヒンドゥー教	世・倫	47	宗教社会学の諸理論	——
23	ユダヤ教: 安息日	——	48	宗教研究の基本姿勢	——
24	日本の宗教: キリスト教: 歴史	日・倫	49	宗教学理論: 通過儀礼	——
25	キリスト教: 祝祭	——	50	宗教学理論: 基礎的概念	——

表4 第3回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

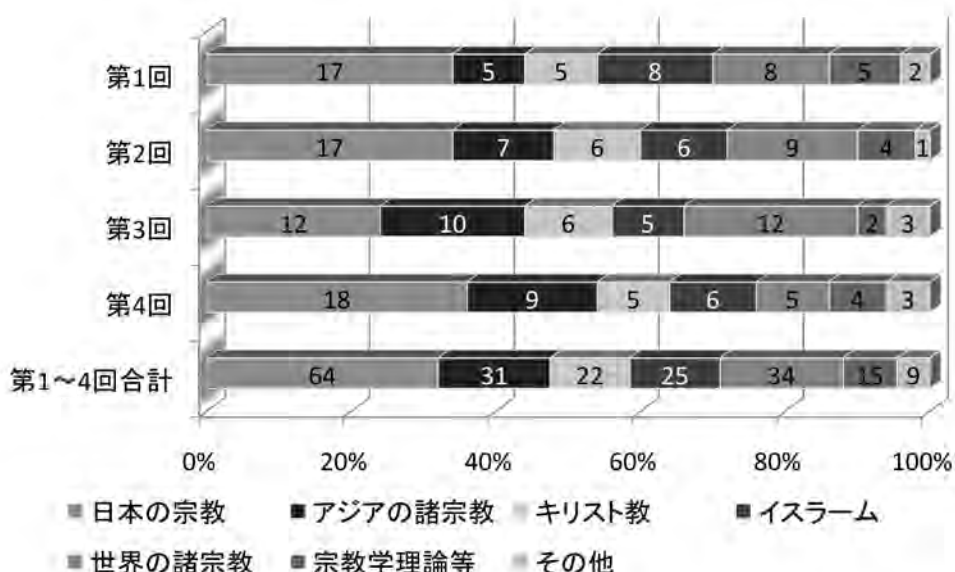
問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 神道: 有名神社	——	26	キリスト教: 修道会	——
2	日本の宗教: 神仏習合・宗教史	日・倫	27	キリスト教: 基礎知識・歴史	世・倫
3	日本の宗教: 神道: 伊勢の遷宮	——	28	キリスト教: 東方正教会	——
4	日本の宗教: 仏教: 鎌倉仏教	日・倫	29	キリスト教: 各国・建築・世界遺産	世・地
5	日本の宗教: 仏教: 歴史・中国からの影響	日・倫	30	イスラーム: コーラン	倫
6	日本の宗教: 仏教: 平安・鎌倉仏教	日・倫	31	イスラーム: 戒律	——
7	仏教: ブッダ・経典	倫	32	イスラーム: 礼拝	——
8	日本の宗教: 神道・仏教: 基礎知識	——	33	イスラーム: ヒジュラ暦	——
9	日本の宗教: キリスト教	日	34	イスラーム: 断食	——
10	ユダヤ教・キリスト教: 聖書	世・倫	35	西アジアの宗教: ユ・キ・イ・ゾロアスター: 各国	世
11	日本の宗教: 新宗教: 近代	——	36	ユダヤ教: 戒律・食物	——
12	日本の宗教: 新宗教: 近代	——	37	ユダヤ教: 安息日	——
13	日本の宗教: 仏教・山岳信仰	日・倫	38	世界の諸宗教: 派生集団: 近現代	——
14	日本の宗教: 文学と宗教思想	——	39	世界の諸宗教: 仏・ユ・キ・イ・儒: 教え	倫
15	世界の諸宗教: 仏・キ・ヒ・ユ・道: 分布・各国	世・地	40	世界の諸宗教: ヒ・ユ・キ・イ・仏: 衣装	——
16	東アジアの宗教: 分布・各国(日・中・韓・台)	——	41	世界の神話: 日・ギ・印・ロ・中	世・倫
17	韓国の宗教	——	42	世界の諸宗教: 戒律・食物・各国	——
18	中国の宗教: 儒・道	——	43	世界の諸宗教: ユ・キ・イ・神・仏: 偶像崇拜	世・倫
19	中国の宗教: 現代	——	44	世界の諸宗教: ユ・イ・仏: 映画	——
20	東南・南アジアの宗教: 分布・各国	地	45	世界の諸宗教: 歴史的人物・各国	世・倫
21	インドの宗教: ヒ・イ・ジャイナ	世・地・倫	46	世界の諸宗教: ヒ・キ・イ: 原理主義・各国	——
22	東南アジアの宗教: 上座仏教: 分布・各国	——	47	世界の諸宗教: 印・キ・イ: 教え	倫
23	アジアの宗教: 分布・各国: 世界遺産	世	48	世界の諸宗教: 分布・各国: 政教分離	——
24	タイの上座仏教: 僧侶の戒律	——	49	日本の宗教研究者	——
25	キリスト教: 基礎知識・歴史	世・地・倫	50	世界の宗教研究者	——

表5 第4回宗教文化士試験 記号選択式問題の内容一覧

問	問題のテーマ	地歴公民	問	問題のテーマ	地歴公民
1	日本の宗教: 年中行事・人生儀礼	——	26	インドの宗教: ジャイナ教	倫
2	日本の宗教: 神道: 教え・水	——	27	インドの宗教: ヒンドゥー教	——
3	日本の宗教: 神仏関係・宗教史	——	28	インドの宗教: シク教	世
4	日本の宗教: 神道: 神社	——	29	キリスト教: 基礎知識	——
5	日本の宗教: 神道: 伊勢神宮・遷宮	——	30	日本の宗教: キリスト教: 歴史	日
6	日本の宗教: 日本文学と仏教	日・倫	31	キリスト教: 日本・基礎知識	世・日
7	日本の宗教: 民俗宗教	——	32	キリスト教: 分布・各国	世・地
8	日本の宗教: 仏教: 食事・僧侶	——	33	キリスト教: 現代の動向	——
9	日本の宗教: 仏教: 海外との比較	——	34	キリスト教: 東方正教会: 各国	——
10	日本の宗教: 仏教: 平安・鎌倉	——	35	ユダヤ教: 戒律・食事	——
11	日本の宗教: 仏教: 禅宗	——	36	ユダヤ教・キリスト教・イスラーム	倫
12	日本の宗教: 仏教: 葬式・教え	——	37	イスラーム: メッカ	世・倫
13	仏教: 基本知識	倫	38	イスラーム: 戒律・食事	——
14	日本の宗教: 仏像: 美術・教え	——	39	イスラーム: ラマダーン	——
15	アジアの宗教・仏教: 各国	——	40	イスラーム: シーア派	世・地・倫
16	アジアの宗教: 仏教: 各国	世・地・倫	41	イスラーム: 基礎知識	——
17	日本の宗教: 宗教人口	——	42	イスラーム: 分布・各国	地
18	日本の宗教: 新宗教: 近代	日	43	世界の神話: ギ・印・日・旧約	世・日・倫
19	日本の宗教: 社会事業: 近現代	——	44	世界の神話: 宗教史	——
20	世界の諸宗教: キリスト教系: 近現代	——	45	世界の諸宗教: 仏・ユ・キ・イ・日: 経典	倫
21	日本の宗教: 富士信仰	——	46	世界の諸宗教: 葬法	——
22	中国の宗教	——	47	宗教学理論・概念: 宗教多元主義	——
23	中国の宗教: 儒教	倫	48	宗教学理論・概念: 儀礼	——
24	中国の宗教: 陰陽五行説	倫	49	世界の宗教研究者	——
25	中国の宗教: 仏教	世・日・倫	50	宗教研究の立場	——

に、地域的にはヨーロッパとアメリカを中心にキリスト教へと続く。そして、イスラームについては必ず数問が展開される。その後は、ユダヤ教などをはさみながら、「世界の諸宗教」に関する比較宗教史・学的な問題が続く。最後は、宗教学の諸理論や基礎概念が4・5問出され、幕を閉じるのである。こうした設問の構造を割合別に表したのが、下記のグラフ1となる。

グラフ1 第1～4回宗教文化士試験 記号選択式問題のテーマ別割合



単純に言えるのは、かなりまんべんなく出題されるということである。もちろん試験に合格するためには満点である必要はないが、知識理解の「穴」があると厳しい。神道系大学で神道学や神道史の授業を、仏教系大学で仏教学・仏教史の授業を、キリスト教大学でキリスト教学・キリスト教史の授業を、また各専攻で宗教社会学や人類学・民俗学の授業を受けただけではとても太刀打ちできない広がりを持っていることをまず指摘できる。

一つ一つの領域で問われる内容のタイプを見ていこう。

まず、「日本の宗教」である。記号選択式の前半を占めるこの領域は、厳密な線引きは難しいものの「日本宗教史」「基礎知識・作法・習俗」「現代的諸問題」に分けられる。比重が大きいのは、前2者である。「現代的諸問題」は、宗教教育（Ⅰ-14）・信教の自由と宗教法人（Ⅰ-16）・社会事業（Ⅳ-19）など、出ても2・3問にかぎられる。「日本宗教史」は、

ア 平安時代までは神と仏は別なものとして考えられていたので、神仏習合はまだ見られなかった。

イ 神前読経というのは、神に対して僧侶が仏教の経典を読むことである。

ウ 江戸時代に檀家制度が成立すると、神仏習合状態はしだいになくなっていった。

エ 明治政府はそれまでの神仏習合状態を解消するために神仏分離令を出した。

オ 戦後は、政教分離を徹底させるため、宗教法人法により檀那寺という制度が廃止された。（Ⅲ-2、正答はイ・エ）

のように、神仏習合や神仏分離などに関するもの、日本仏教の歴史特に平安仏教や鎌倉仏教の祖師に関連するもの（Ⅰ-8、Ⅱ-8、Ⅲ-6、Ⅳ-10 など）、江戸期以降の檀家制度に関するもの（Ⅱ-9 など）が目立つ。日本のキリスト教史も必ず問われている（Ⅰ-24、Ⅱ-24、Ⅲ-9、Ⅳ-30）。なお、近代の新宗教については、出ても2問程度である。

他方、「基礎知識・作法・習俗」としては、

ア「神社はイスラム寺院（モスク）と似たところがあり、崇拜対象を置いたりしません。お寺はキリスト教会と似たところがあり、仏像が一体だけあります。」

イ「神社で神職が唱えるのは祝詞ですが、お寺で僧侶が唱えるのは念仏です。」

ウ「神社にはご神体というものがあります。お寺にはそれぞれの宗派で信仰する仏像があります。仏像は複数の場合もあります。」

エ「神社に参拝する人に対応してくれる宗教者は神主さんですが、お寺に参詣する人に対応してくれる宗教者はお坊さんです。」

オ「神社はすべて古代にできていますが、お寺は鎌倉時代や江戸時代にできたものもあります。」（Ⅱ-5、正答はウ・エ）

のように、神道（神社）と仏教（寺院）の特徴や両者の違いに関するもの（Ⅰ-3、Ⅱ-12、Ⅲ-8、Ⅳ-2 など）、神社の参拝法（Ⅱ-2）や仏教式の葬式（Ⅳ-12）に関するもの、年中行事や人生儀礼や民間信仰に関わるもの（Ⅰ-11、Ⅱ-15、Ⅳ-1 など）などがある。これらは、設問のシチュエーションにしばしば外国人や留学生に説明する場面が登場することなどからも、自文化理解とその説明力が問われているのだと言えよう。

次に、「アジアの諸宗教」である。特に中国（Ⅰ-20、Ⅱ-16・26、Ⅲ-18・19、Ⅳ-22・24・25）や韓国（Ⅲ-17）のウェイトが大きい。しかも歴史だけではなく、現在の状況もよく問われている。東南アジアは、イスラームと仏教（大乘・上座部の区別など）についてよく問われる（Ⅰ-18、Ⅱ-17・18・19、Ⅲ-20・22・23・24、Ⅳ-15・16）。南アジアは、インドが中心でヒンドゥー教を中心に問われる（Ⅱ-21・22、Ⅲ-21、Ⅳ-26・27・28）。これは地理的に近い諸国の状況の理解とともに、日本への移民や訪問者も多いなかでの文化理解の必要性を反映した内容と比重になっていると考えられる。

続いて、「キリスト教」である。これは前掲の表のとおり、イエスや聖書など基礎的知識を問うもの、カトリックとプロテスタントまたは東方正教会の共通性や違いを問うもの、建築などと絡めながらヨーロッパ諸国を中心にその国の教派分布を問うもの（Ⅲ-29、Ⅳ-32）などからなる。コンスタントに5～6問が出ている。

「イスラーム」もまた必須の領域であり、5～8問が出ている。六信五行、モスク、食事、ラマダン、コーラン、礼拝、服装、暦などムスリムの生活と結びついた基本的教えについてまとまって多く問われているのが特徴である。特に後述するが、戒律・タブーに関する設問が目立つ。これはやはり他者・他文化理解という点で、日本国内でも徐々に増えつつあり接する機会も増えると思われるムスリムの生活と教えを理解しているかが強く問われているものだと言えよう。

「世界の諸宗教」関連の問題は、いわばオールジャンルの・宗教伝統を横断的に問うものである。聖地・シンボル・建築・儀礼・暦・衣装・葬法といった特定のトピックについて、諸宗教の場合を問うものが多い（Ⅰ-43・44、Ⅱ-38・39・43、Ⅲ-40、Ⅳ-46 など）。要は、各宗教のケースを瞬時に引き出せるかが問われている。世界の神話に関連する理解も必須で

ある（Ⅰ-35、Ⅱ-20、Ⅲ-41、Ⅳ-43・44）。また、これは全体に関わるが、世界遺産や映画・文学・美術などに絡めた問題もよく問われるようになっている（Ⅰ-15・40、Ⅲ-14・23・29・44、Ⅳ-6・14・44など）¹⁴。

残るは「宗教学理論等」だが、これはあまりウエイトが大きくない。問われる中身もあまり立ち入ったものではない。ウェーバー、デュルケム、フレーザー、オットーなどの諸学者の代表著作や代表的概念は、単純に知らなければ解きにくい（Ⅰ-49、Ⅲ-50、Ⅳ-49）。だが、いくつかについては、常識的な判断・読解や後述する極端な選択肢の排除により解けるものも散見される（Ⅰ-46・47・48・50、Ⅱ-48、Ⅳ-50）。

以上、各領域で問われる内容のタイプを概観してきた。ここで指摘した傾向については、過去4回で大きな変化は見られなかった。よって、宗教文化士試験の問題構成の骨格部分としてある程度は理解できると言えよう。

続いて、領域横断的に観察できるいくつかの特徴を指摘しておきたい。

まず、表2～5にみられる「分布」「各国」というキーワードに注目してほしい。第1回には50問中9問、第2回には5問、第3回には10問、第4回には5問が確認できる。もちろんそれ以外にも中国・韓国・インド・タイの各国に特化した設問もある。それらも含めて考えると、かなりの割合と言えるのではないだろうか。すなわち、仏教・キリスト教・イスラーム・ヒンドゥー教等の諸宗教の教えだけではなく、「○○国・地域の宗教人口・分布は△△である」という理解にかなりのウエイトが置かれているのである。このことは世界遺産や観光のトピックともつながる。また、その国・地域からの来訪者を迎える際に、食事等にどういう注意が必要か、あるいはもっとシンプルに話のきっかけにどういうトピックがいいか、ということにもつながるのである。

次なる特徴として挙げられるのは、「タブー・戒律に関する理解の重視」である。諸宗教のタブーと戒律について問う設問が目立つ。第1回では6問（Ⅰ-27・30・32・33・37・38）、第2回では8問（Ⅱ-17・18・23・32・33・34・36・44）、第3回では7問（Ⅲ-31・32・34・36・37・42・43）、第4回では6問（Ⅳ-9・29・35・38・39・41）が該当する。

ア 「エホバの証人は輸血を禁じているらしいから、病院関係者はそれを知っていないといけないね。」

イ 「ユダヤ教徒はうろこのない魚を食べてはいけないらしいから、お寿司屋に連れて行くときは注意した方がいいよ。」

ウ 「イスラーム教徒はコーヒーを飲んではいけないらしいから、喫茶店には誘わない方がいいよ。」

エ 「ヒンドゥー教では豚肉がタブーなので、インドではポークカレーはないらしい。」

オ 「ユダヤ教のラビは結婚してはいけないらしいから、つきあうときは知っておいた方がいいよ。」（Ⅱ-44、正答はア・イ）

のように、諸宗教横断的なものもあるが、最も目立つのがイスラームに関連するものである。そして、ヒンドゥー教、ユダヤ教、上座仏教のケースが続く。日本の宗教あるいは中国・韓国の宗教、キリスト教に関連する設問ではほとんど含まれていない。トピックとしてはやはり食物に関するものが多い。こうした背景には、やはりグローバル化により人の往来が激しくなり、日本人や企業が海外に出て行ったとき、あるいはイスラーム圏やヒンドゥー圏などの人々が日本にやってきたときに、円滑に交流をする——裏を返せばトラブルを回避

するために必要不可欠な理解だ、という理念があると思われる。その意味で、本試験において求められていることのかかなり重要な部分を構成すると言えよう。

最後に、いくぶんテクニカルな問題になるが、「極端な選択肢がいくぶん目立ち、それが正答になりにくい」という傾向を指摘できる。これはいわゆる「受験テクニック」だが、「しか」「のみ」「だけ」などの限定、「みな」「すべて」「必ず」「どこでも」などの全包含、「できない」「全く～ない」などの全否定の表現を含む選択肢は、一般的に正解になりにくい傾向がある。一つでも他の事例や例外があれば、不適となるからである。筆者がカウントしたかぎりでは、試験問題にこうした選択肢の広がりが見られた。第1回では、全250選択肢のうち40選択肢に見られた。このうち正答選択肢となっているのは、1つだけ（Ⅰ-1-エ「神仏分離を行い、神社と寺院は明確に分けられることに」）だった（下線は筆者による。以下、同じ）。第2回では、37選択肢に見られ、正答は2つだけ（Ⅱ-27-オ「（モルモン教・エホバの証人・キリスト教科学は）いずれも19世紀にアメリカで生まれた」、Ⅱ-36-エ「（イスラームでは火葬は）特に忌避される」）だった。第3回になるとやや減り、20選択肢（正答は0）だった。第4回は17選択肢（正答0）だった。具体例を挙げよう。Ⅲ-3の伊勢神宮の式年遷宮を問う問題では、

ア 遷宮というのは伊勢神宮だけで行われる特殊なものである。

イ 伊勢神宮の遷宮は20年に1回行われ、これは千年以上にわたって一度も断絶することがなかった。

エ 遷宮が終わったあとは、古い社に使っていた木材等はすべて焼却される。

の3選択肢が不適である。もちろんこれは結果論であって、場合によっては「だけ」「一度も～ない」「すべて」というケースもありうる。また、Ⅱ-48は、

ア 20世紀以降に誕生した宗教は評価が定まっていないため研究対象としないことになっている。

イ 地域社会で伝承されてきた年中行事や人生儀礼、芸能なども研究対象とされている。

ウ 研究の客観性を保つため、宗教学者は現在生きている宗教者を研究対象とすることはない。

エ 文字資料が残っていない古代の宗教は、研究対象からはずされている。

オ いくつかの宗教を対象として比較研究をおこなうことは、重要な研究方法のひとつと考えられている。

という問題であり、ア・ウ・エが不適である。「○○国・地域には△△教の信者はいない」（Ⅰ-22-イ・ウ、Ⅰ-25-ウ、Ⅲ-21-オ、Ⅲ-28-オ、Ⅲ-35-オ、Ⅳ-32-オ）といった選択肢も軒並み不適となっている。また、枝葉末節となるが、Ⅲ-35-ウは「エルサレムはユダヤ教とキリスト教にとっては聖地であるが、イスラームにとってはメッカのみが聖地で、エルサレムには特に宗教的意味はない」という不適選択肢であるが、これはやや不自然である。この選択肢が適切なら「メッカのみが聖地である」で結べばいいのであって、「エルサレムには特に宗教的意味はない」というのは、実際にはあるのを裏返したがゆえである¹⁵。ここで指摘したいのは、まだ回が浅いため作問にこなれていないということではない。また、一選択肢あたり12秒ほどで読み解かなければならないなか、このようなことを気にしていられないという向きもある。そうではなく、特に不適選択肢を作ることの困難性についてである。それは現実の宗教文化・宗教現象が多様であるからに他ならない。宗教人口分布にかぎって

も、ある地域にある宗教の信者がひとりもいない／いなくなったということは現実的には考えにくい。もちろんなかには前述のタブー・戒律や「これまでに一度も～ない」といった堅く守られているような事例もあろう。だが、これですらタブーを守らないこと・人もあるわけで、現実的には多い／少ない、～～という傾向があるという程度問題である。こうした構造的背景があるため、実は宗教文化について適・不適を判断する——特に意図的に不適選択肢を作成することには困難性がともなうのではないかということを描きおきたい。

以上、第1回～第4回の宗教文化士試験の内容を分析してきた。過去問分析という性質上、諸特徴・論点・傾向を列記する形になってしまったが、同試験において何が求め問われているかを把握できたと言えよう。

3. 宗教文化士試験問題と高校地歴・公民分野との連続性と差異

続いて本節では、前節の過去問の内容分析を踏まえた上で、そこで問われている内容の水準について考察したい。既述のように、宗教文化士試験は、主に大学での宗教文化教育を前提としている。すなわち、高校までの（宗教に関する）教育を受けた学生が、宗教文化に関する授業を受け、学習・理解をした上で到達すべき内容が、試験問題に盛り込まれていると一応は考えることができる。よって、そのためには、高校までの学習内容によって試験問題をどれくらい解け、どれくらい解けないか、つまりその連続性と差異を捉えておく必要があるのである。

もちろん高校までの教育の内容といっても一様ではない。ここでは公立・私立・宗教系私立を問わず何らかの形で必修の「宗教知識教育」である、地歴・公民分野の内容に範囲を限定したい。基準として用いるのは、山川出版社の日本史、世界史、地理、倫理、政治・経済のそれぞれの用語集である¹⁶。これらの用語集は、各教科の現行の教科書すべてから重要語・キーワードを選び出して編まれたものである。よって、高校生特に受験生に広く用いられていること、センター試験の地歴・公民科目や各大学の地歴・公民受験問題の内容にもよく対応していることなどから、ある程度の網羅性と妥当性は確保されていると言え、広く参照できる資料の範囲で基準として用いるには最も適していると考えられる。

ここで再び、表2～5を参照してほしい。各設問テーマ横の「地歴公民」欄の科目名は、高校地歴・公民科目の内容との連続性を示している。記載基準としては、各設問の5選択肢のうち正答の2選択肢の内容が各用語集に載っている場合（つまりその科目で扱った内容によりその問題を積極的に正解できる）、ならびに不適も含む3選択肢以上の内容が載っている場合、とした¹⁷。もっとも、用語集に断片的に載っているからといって、必ずしも学習済みとは言えないだろうし、それで正答できるとは限らないので、あくまで目安と考えたい。第1回では33問、第2回では23問、第3回では22問、第4回では18問が該当すると判断した。ただし、科目が日・世・地・倫・政に広くわたっているため、当該回の問題が高校レベルの理解で易々と回答できるということを意味するのではない。以下では、前節で述べた領域・テーマごとに地歴・公民分野の内容との関連を探りたい。

まず注目すべきは、「日本の宗教」領域の設問と、日本史・倫理内容との相性の良さである。例として、「南無妙法蓮華経」の意味を問うⅢ-4や、日本仏教と中国との関係などを扱う、

ア 「天台宗に関心があるようですが、天台宗はもともと中国で形成されたものですか

ら、日本に伝わった経緯をきちんと調べたらいいでしょう。」

イ 「奈良仏教に関心があるようですが、奈良時代の仏教は朝鮮半島から伝わったもので、中国からの影響はまだありませんでした。」

ウ 「平安時代に中国に行って密教を学んだ僧侶について研究したいなら、まずは空海のことを調べたらいいでしょう。」

エ 「鎌倉時代に中国にはない日本独自の宗派を開いた人を調べたいなら、栄西か道元がいいでしょう。」

オ 「江戸時代にも中国から新しい宗派が伝えられました。時宗と呼ばれるもので、隠元という中国の僧が伝えましたから、彼のことを調べたらどうですか。」(Ⅲ-5、正答はア・ウ)

といった、特に「日本宗教史」関連の設問(Ⅰ-8など複数)の多くは、日本史・倫理履修者なら比較的容易に正答できるだろう。

次に、これは領域横断的ではあるが、「アジアの諸宗教」のうちの儒教・道教等や「仏教」「ユダヤ教」「キリスト教」「イスラーム」「ヒンドゥー教」など世界の諸宗教の基礎に関わる問題は、倫理の内容で解けるものも目立つ。仏教に関する、

ア 「三宝」とは、仏教において帰依の対象となる3つの宝を意味し、具体的には仏・法・僧のことである。

イ 「四聖諦」とは、苦の状態から悟りに至る道筋を示した仏教の根本的な教えの1つであり、苦諦・集諦・戒諦・道諦の4つの真理を意味する。

ウ 「四苦」とは、人間だれもが向かい合わなくてはならない災老病死の四つの苦を意味する。つまり、災いにあうこと、老いること、病になること、死である。

エ 「五戒」とは、仏教においておもに在家信者が守るべき5つの戒であり、具体的には、「不殺生戒」・「不偷盗戒」・「不邪淫戒」・「不妄語戒」・「不飲酒戒」からなる。

オ 「六道」とは、地獄界など6つの世界のことであるが、人間界はここには含まれない。(Ⅳ-13、正答は、ア・エ)

といった問題や、比較宗教的な、

ア 仏教において、在家信者の五戒として知られているのは、不殺生戒・不偷盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒である。

イ 旧約聖書の創世記には、「人類は兄弟であるから、皆仲良くしなさい」という神の命令が最初の方にある。

ウ イスラームの戒律の特徴は、宗教家など特別の人に限定されたものではなく、すべてのイスラーム教徒がまもるべき規範であるということである。

エ 「父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信」は一般に五倫と呼ばれ、中国の老荘思想の中心的教えの一つである。

オ カトリック教会では結婚も離婚も、ともに秘蹟の一つであるので、教会で行われる。(Ⅲ-39、正答は、ア・ウ)

やⅢ-47、Ⅳ-36、陰陽五行説を扱ったⅣ-24、ジャイナ教を扱ったⅣ-26、世界神話を扱ったⅣ-43なども、倫理履修者にとっては比較的容易である。

というのも倫理には、大項目として「源流思想」があり、そのなかでギリシア神話・ユダヤ教・キリスト教・イスラーム・ヒンドゥー教・仏教・儒教・老荘思想などの思想面とその

用語をかなり詳しく扱うのである。また、日本の思想のなかでは神道的世界観、奈良・平安・鎌倉仏教、国学、内村鑑三などを扱う。西洋思想のなかには宗教改革の項目もある。よって、倫理履修者、かつ日本史や世界史も併せて履修し歴史方面の理解も進んでいるような場合には、かなり解ける問題が増えてくるのである。

続いて、「キリスト教」関係のものは、世界史科目における西洋史の比重が大きいこともあってか、

ア トルコのイスタンブールにあるアヤ・ソフィアという建物は、かつてイスラームのモスクであったが、現在はギリシア正教の大聖堂である。

イ イングランド南東部にあるカンタベリー大聖堂は、イギリス国教会の有名な教会である。

ウ クロアチアにある聖ヤコブ大聖堂は、東方正教会に属する古い教会である。

エ ドイツのケルンにあるゴシック建築で有名な大聖堂は、プロテスタントの教会である。

オ 世界遺産となっているフランスのシャルトル大聖堂は、中世にできたカトリックの教会である。(Ⅲ-29、正答はイ・オ)

や、Ⅲ-25、Ⅲ-27 など、各国とキリスト教との基本的関係がつかめていれば解けるものが目立つ。また、中国仏教史上の人物、鳩摩羅什・玄奘三蔵を扱ったⅣ-25 など世界史での重要項目であるため、回答は容易と思われる。

次に、「分布」「各国」などのキーワードがある設問には、地理と世界史の内容が適しているといえる。

ア 南アフリカに社員を派遣するとき、学生時代にイスラームについて学んだ社員を選ぶ。

イ パキスタンに社員を派遣するとき、学生時代にキリスト教について学んだ社員を選ぶ。

ウ イスラエルに社員を派遣するとき、学生時代にユダヤ教について学んだ社員を選ぶ。

エ エジプトに社員を派遣するとき、学生時代にイスラームについて学んだ社員を選ぶ。

オ ミャンマーに社員を派遣するとき、学生時代にヒンドゥー教について学んだ社員を選ぶ。(Ⅰ-41、正答はウ・エ)

や、Ⅲ-20、Ⅳ-42 のようなシンプルにその国・地域の宗教分布を問うものである。これも地理・世界史において、その国の宗教背景について目をやっておけば回答できよう。

他方、残された政治・経済で扱う内容と、試験問題内容との重複はほとんどない。政治・経済において宗教が関連するのは、日本国憲法のところの「信教の自由」「政教分離」「津地鎮祭訴訟」「靖国神社公式参拝」「神道(神社神道)」など程度である。過去問では、Ⅱ-41-オ「戦前の日本では、主な神社は国家により管理されていたが、戦後は政教分離の原則に基づき、国家によって管理されることはなくなった」や、Ⅱ-14-ア「現在の憲法においても、日本では「信教の自由」は正式には認められていない」(不適)などごく一部の選択肢が対応するのみである。政治・経済履修者に連続性はほぼないのが現状である。

では、以上のようなある程度の連続性を捉えた上で、それならどういった内容が地歴・公民の内容の範囲内で扱われておらず、大学における宗教文化教育における上積みとして要されているかを考えてみたい。

これも前節の区分に従えば、まずは「日本の宗教」のなかの「基礎知識・作法・習俗」に関わる内容である。日本史を学べば、歴史的変遷や出来事や祖師・宗派の名前などは理解できる。だが、神社や寺院の造り、参拝の際のマナー、冠婚葬祭の変化、年中行事の由来、民俗宗教・民間信仰的な内容などについて、中学・高校において「宗教教育」を受けることはなかなかないのではないだろうか。そして、こういった「他文化」になりつつあるような「自文化」について、外国人に問われた時にどう説明するか／できるか、という問題意識が底流にあるようである。これは、大学における宗教文化教育として想定されている内容の大きな一角を構成するものと思われる。

次に、これも前節で捉えた「タブー・戒律に関する理解の重視」である。確かにイスラームやユダヤ教、ヒンドゥー教については倫理や世界史などである程度は学ぶ。しかし、現実には職業等を含めて付き合う・向かい合う場合にまず留意すべきは、歴史や諸概念などではなく、飲食や衣装、身体接触等を含む生活文化や習慣である。試験問題では、特にその点が反復して重点的に問われているのである。

そして最後に、「各国」・地域の宗教「分布」と現状である。これも、地理・世界史履修者にはおなじみの理解もあろうが、特にそのウェイトが「いま」に置かれていることに注意が必要だ。現在の中国の宗教状況や政策はどうか、韓国基督教の現在はどうか、イスラーム諸国の現状はどうか、そういった点の理解については、大学における教育が期待されているのだと言ってよいだろう。

以上が、高校地歴・公民教育との差異であり、大学における宗教文化教育の内容として期待されている内容と考えられる諸点である。第1回から第4回まで回を追うごとに、高校地歴・公民分野の内容だけで解ける問題は減ってきている。これはすなわち、それだけ大学における宗教文化教育に求められる内容のウェイトが大きくなってきているということであろう。

おわりに

以上、第1回～第4回の宗教文化士試験の問題内容を分析し、その領域ごとに扱われているテーマをまとめて傾向を捉えてきた。また、高校地歴・公民科目の内容との比較検討を行い、その連続性と差異を明らかにしてきた。分析内容については、ここでは繰り返さない。

ここまで分析を進めて考えるのは、では自らの授業内容をどう（再）検討・点検しているのか、ということである。もちろん、宗教文化士試験の合格が最終目標ではないし、試験に出そうなことだけを扱えばそれで足りるのではない。だが、参照軸ないし共通のプラットフォーム的に、同試験で、そして宗教文化教育で、何が目指されようとしているのかをつかんでおくことは（特に筆者のようにキャリアの浅い教員＝宗教研究者にとって）無駄ではないだろう。本稿で提示したデータが自ら以外に少しでも参考になるなら、幸いである。

また、高校地歴・公民科目の内容との連続性を捉えた点も、独自の意義があるように思える。具体例は省くが、筆者の少ない経験から言えば、高校までで扱ったような内容を「宗教（社会）学」の視点や文脈から、たとえば「宗教に関する問題」として提示・説明すると、学生からは「新鮮だった」「驚いた」という反応を聞くことがしばしばある。目の前の学生が受けてきた教育・科目とその内容や水準は当然さまざまであるが、高校までにどういうことが扱われているかについて、教員側は無頓着ではいけないように思う。この側面の分析も

今後さらに進めたい。

そして、これからも進められるであろう宗教文化教育——宗教文化士試験の問題内容の分析も継続し、その目指すところを追っていきたいと考える。

注

- 1 宗教教育の従来的な類型や議論については、菅原伸郎『宗教をどう教えるか』朝日選書、1999年を参照。その従来的な枠組が「宗教文化教育」により刷新される可能性については、井上順孝「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』85-2、2011年、111-136頁を、「宗教文化」概念の教育ならびに宗教研究における有効性・可能性については、土屋博『宗教文化論の地平—日本社会におけるキリスト教の可能性—』北海道大学出版会、2013年を参照。
- 2 そうした宗教文化に関する授業内容の研究の取り組みについては、平藤喜久子「「宗教文化の授業研究会」の試み」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、55-62頁を、教材開発の取り組みについては、今井信治「教材開発の現状報告」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、63-71頁などを参照。
- 3 同科研サイト (<http://www2.kokugakuin.ac.jp/shukyobunka/index.html>) を参照。
- 4 宗教文化教育推進センターサイト (<http://www.cerc.jp/>) を参照。以下、同サイトコンテンツの紹介・引用は、「CERC サイト「(項目名)」を参照」と示す。
- 5 宗教文化士制度の発足までの展開やその意義等については、井上順孝「「宗教文化士」制度の発足へ向けて」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』3、2010年、29-36頁、同「宗教文化士制度発足への歩み」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、37-43頁、土屋博「宗教文化士資格認定制度の意義と展望」『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報』4、2011年、31-35頁などを参照されたい。
- 6 第1回から第4回までの認定試験の問題（記号選択式・論述式）ならびに解答については、CERC サイトにて公開されているので、本稿ではこれを用いる。CERC サイト「教材」→「過去問題集」を参照。
- 7 CERC サイト「宗教文化士とは？」を参照。
- 8 CERC サイト「単位認定・到達目標」を参照。
- 9 CERC サイト「宗教文化士資格取得者の所属・修了大学」を参照。
- 10 CERC サイト「新聞・雑誌などでの紹介」を参照。
- 11 各回論述式問題の実際の設定問文・選択肢文は、CERC サイト「教材」→「過去問題集」→各回の「論述式」を参照。
- 12 第1回過去問の記号選択式問題の回答には、「(設問に曖昧な点があったとして)「ア、オ」に加え、「ウ、オ」も正解とすることにしました」とある。また、第2回・第3回にも、作問ミスなどから1つの選択肢が合っていればその設問を正解とするとした箇所がある。
- 13 CERC サイト「教材」→「過去問題集」→各回の「記号選択式」を参照。
- 14 これは宗教文化に関連する映画・世界遺産・文学・美術などを入口／媒介にして、より理解を深めようという宗教文化教育の方針に裏打ちされている。CERC では、これに関連したデータベース類の構築と教材としての提供作業が進められている。CERC サイト「教材」→「各種データベース」→「世界遺産と宗教文化」「映画と宗教文化」などを参照。
- 15 他にも、II-5-ア「(お寺には) 仏像が一体だけあります」・ウ「仏像は複数の場合もあります」など、同一設問あるいは別設問の間で相反する選択肢が見られる場合もある。
- 16 全国歴史教育研究協議会編『日本史B用語集 改訂版』山川出版社、2009年、全国歴史教育研究協議会編『世界史B用語集 改訂版』同、2008年、地理用語研究会編『地理用語集 改訂版』同、2009年、濱

井修監修・小寺聡編『倫理用語集 改訂版』同、2009年、政治・経済教育研究会編『政治・経済用語集 改訂版』同、2009年を用いる。なお、「現代社会」科目については、現代社会教科書研究会編『現代社会用語集 改訂版』同、2008年の掲載項目を検討したが、宗教思想の領域では倫理と、憲法の信教の自由と政教分離規定の項目では政治・経済と、内容的には大差ないあるいは簡潔にしたものと判断したため、本稿では省略したい。

- 17 高校地歴・公民教育における「宗教」に関する内容についての批判的分析は、藤原聖子『教科書の中の宗教—この奇妙な実態—』（岩波新書、2011年）などを参照。なお、筆者自身は日本史、世界史、倫理、政治・経済を履修した経験があり、どの科目でこういった内容が扱われているかについては（やや時間的な隔たりがあるものの）、週及的に用語集の内容を確認することなどを通して、ある程度捉えられている。また、2000年代中盤には予備校・進学塾において倫理の集団授業を担当した経験があり、その扱う内容ならびに主にセンター受験を念頭においた際の高校生の理解度・達成度についても、把握できていると考える。以上に基づく、各設問・選択肢に対する判断であることをことわっておく。